神戸大学石川慎一郎研究室　http://language.sakura.ne.jp/s/

ベーシック応用言語学

―L2 の習得・処理・学習・教授・評価―

ISBN: 978-4-89476-795-9

石川 慎一郎(著)，ひつじ書房

2017 年 3 月刊行

まえがき

目次

1 章 応用言語学と第 2 言語教育

1.1 本章で学ぶこと

1.2 応用言語学の歴史

1.2.1 萌芽期

1.2.2 確立期

1.2.3 発展期

1.2.3.1 L2 習得の心理学的側面に関わる研究

1.2.3.2 L2 教授法の開発に関わる研究

1.2.3.3 L2 学習者の属性に関わる研究

1.2.3.4 L2 能力の評価に関わる研究

1.2.3.5 言語の社会的機能や位置付けに関わる研究

1.3 現代の応用言語学

1.4 発展学習のために

1.4.1 文献ガイド

1.4.2 研究のヒント

第 1 部　第 2 言語の習得と学習

2 章 言語習得の基本モデル

2.1 本章で学ぶこと

2.2 3 つの立場

2.3 経験説

2.3.1 経験説に基づく発達モデル

2.3.2 経験説に基づく言語習得モデル

2.3.2.1 3 つの行動タイプ

2.3.2.2 行動心理学モデルに基づく言語習得観

2.3.2.3 行動心理学モデルの課題

2.4 生得説

2.4.1 生得説に基づく発達モデル

2.4.2 生得説に基づく言語習得モデル (1)：普遍文法モデル

2.4.2.1 普遍文法とは何か

2.4.2.2 生成文法の展開

2.4.2.3 普遍文法モデルの課題

2.4.3 生得説に基づく言語習得モデル (2)：モニタモデル

2.4.3.1 モニタモデルの概要

2.4.3.2 モニタモデルを構成する 5 大仮説
2.4.3.3 モニタモデルの課題
2.5 複合説
2.5.1 複合説に基づく人間の発達
2.5.2 複合説に基づく言語習得モデル
2.6 言語習得の仕組みをどうとらえるか
2.7 発展学習のために
2.7.1 文献ガイド
2.7.2 研究のヒント

3 章　言語の対照

3.1 本章で学ぶこと
3.2 対照分析
3.2.1 対照分析の背景と概要
3.2.2 対照分析の意義と制約
3.3 誤用分析
3.3.1　誤用分析の背景と概要
3.3.2 誤用分析の意義と制約
3.4 中間言語分析
3.4.1 中間言語分析の背景と概要
3.4.2 中間言語研究の意義と制約
3.5 学習者コーパス分析
3.5.1 学習者コーパス分析の背景と概要
3.5.2 学習者コーパス分析の意義と制約
3.6 発展学習のために
3.6.1 文献ガイド
3.6.2 研究のヒント

4 章 言語処理

4.1 本章で学ぶこと
4.2 言語情報の記憶
4.2.1 記憶の種類
4.2.2 ワーキングメモリ
4.3 言語情報の処理
4.3.1 語彙の保持と認知
4.3.2 文の理解
4.3.2.1 統語構造理解
4.3.2.2 意味内容理解
4.3.3 文の産出
4.3.3.1 話し言葉の産出
4.3.3.2 書き言葉の産出
4.4 言語処理と脳機能
4.5 言語処理の観察方法
4.5.1 実験心理学的手法
4.5.2 神経生理学的手法
4.6 発展学習のために
4.6.1 文献ガイド
4.6.2 研究のヒント

5 章 学習者特性 I

5.1 本章で学ぶこと
5.2 年齢
5.2.1 年齢と L2 習得
5.2.2 年齢研究の現状と課題
5.3 適性
5.3.1 適性と L2 習得
5.3.2 適性研究の現状と課題
5.4 性格
5.4.1 性格と L2 習得
5.4.2 性格研究の現状と課題
5.5 発展学習のために
5.5.1 文献ガイド
5.5.2 研究のヒント

6 章 学習者特性 II

6.1 本章で学ぶこと
6.2 学習スタイル
6.2.1 学習スタイルと L2 習得
6.2.2 学習スタイル研究の現状と課題

6.3 学習方略
6.3.1 学習方略と L2 習得
6.3.2 学習方略研究の現状と課題
6.4 動機づけ
6.4.1 動機づけと L2 習得
6.4.2 動機づけの分類
6.4.2.1 社会心理学的アプローチ（統合的・道具的志向性）
6.4.2.2 教育心理学的アプローチ（外発的・内発的動機づけ）
6.4.2.3 過程志向アプローチ（過程モデル）
6.4.2.4 社会的・動的アプローチ（L2 自己モデル・複雑性理論）
6.4.3 動機づけ研究の現状と課題
6.5 発展学習のために
6.5.1 文献ガイド
6.5.2 研究のヒント
第 2 部　第 2 言語の教授と評価

7 章　言語教授法の確立

7.1 本章で学ぶこと
7.2 教授法とは何か
7.3 初期の教授法の変遷
7.4 19 世紀の教授法
7.4.1 グラマートランスレーションメソッド
7.4.2 ダイレクトメソッド
7.5 20 世紀中葉のイギリスの教授法
7.5.1 オーラルアプローチ
7.5.2 グレイディッドダイレクトメソッド
7.6 20 世紀中葉のアメリカの教授法
7.6.1 オーディオリンガルメソッド
7.7 発展学習のために
7.7.1 文献ガイド
7.7.2 研究のヒント

8 章　現代の言語教授法

8.1 本章で学ぶこと
8.2 現代教授法の概観
8.3 理解志向型教授法
8.3.1 トータルフィジカルレスポンス
8.3.2 ナチュラルアプローチ
8.3.3 フォーカスオンフォーム
8.3.4 ホールランゲージ
8.3.5 テキストベーストインストラクション
8.4 コミュニケーション志向型教授法
8.4.1 コミュニカティブランゲージティーチング
8.4.2 コンピテンシーベーストランゲージティーチング
8.4.3 レキシカルアプローチ
8.5 内容志向型教授法
8.5.1 イマージョンプログラム
8.5.2 コンテントベーストインストラクション
8.6 学習者志向型教授法
8.6.1 サイレントウェイ
8.6.2 コミュニティランゲージラーニング
8.6.3 サジェストペディア
8.6.4 多重知能理論
8.6.5 コーパラティブランゲージラーニング
8.7 今後の言語教授法の展望
8.8 発展学習のために
8.8.1 文献ガイド
8.8.2 研究のヒント

9 章　言語能力観

9.1 本章で学ぶこと
9.2 応用言語学における L2 言語能力観
9.2.1 Hymes モデル
9.2.2 Canale and Swain モデル
9.2.3 Bachman モデル
9.2.4 Cummins モデル
9.3 シラバスにおける L2 言語能力観
9.3.1 ヨーロッパのシラバスに見る L2 言語能力モデル
9.3.2 アメリカのシラバスに見る L2 言語能力モデル
9.3.3 日本のシラバスに見る L2 言語能力モデル

9.4 発展学習のために
9.4.1 文献ガイド
9.4.2 研究のヒント

10 章　言語能力の評価

10.1 本章で学ぶこと
10.2 古典的テスト理論
10.2.1 テストの妥当性
10.2.2 テストの信頼性
10.2.3 項目の識別力
10.3 現代テスト理論
10.3.1 古典的テスト理論の制約
10.3.2 現代テスト理論の概要
10.3.3 項目応答理論による能力推定
10.3.4 コンピュータアダプティブテストへの応用
10.4 発展学習のために
10.4.1 文献ガイド
10.4.2 研究のヒント

11 章　言語能力テストの諸相

11.1 本章で学ぶこと
11.2 さまざまな言語能力テスト
11.2.1 言語能力テストのタイプ
11.2.2 主要な言語能力テストの概要
11.3 言語能力テストにおける 4 技能の測定
11.3.1 リスニング力の測定
11.3.2 リーディング力の測定
11.3.3 スピーキング力の測定
11.3.4 ライティング力の測定
11.4 言語能力の共通尺度の開発
11.4.1 CEFR の能力レベル
11.4.2 共通尺度としての CEFR
11.5 発展学習のために
11.5.1 文献ガイド
11.5.2 研究のヒント

参考文献

まえがき

■応用言語学の対象と本書の射程

応用言語学（applied linguistics）とは，「言語が中心的に関わる現実世界の諸問題を理論的・経験的に考究」する研究分野の総称です（Brumfit, 1997）。応用言語学は，言語学を応用した第 2 言語（L2）の教育に関わる研究を基盤領域としつつ，近年では，言語と社会にまたがる広範な研究内容を包含しつつあります。

本書は，応用言語学の扱う広範な内容のうち，その中核をなす「L2 の習得・処理・学習・教授・評価」に関わる分野を対象とします。類似の内容は，応用言語学の下位領域である教授方法論や第 2 言語習得論等の分野でも扱われていますが，いずれの場合も議論の対象を一定の範囲に限っています。これに対し，学際性と網羅性を特徴とする応用言語学は，L2 教育に関連する幅広い内容を統一的に扱うことを可能にします。

■L1 と L2

本書で言う第 2 言語（L2）とは，幼児期に母語（L1）を習得した後で身に付ける，L1 以外のすべての言語を指します。L1 の習得と L2 の習得は多くの点で異なるため，通例，「L2 の習得・処理・学習・教授・評価」は，L1 の場合と別個に論じられます。なお，L2 は必ずしも 1 言語に限定されるわけではなく，L2 として 2 言語，3 言語を学ぶこともあります。

かつては L1 を「母国語」，L2 を「外国語」と呼ぶこともありましたが，言語は必ずしも国民国家の概念を下敷きにするものではないため，本書では，原則として，母語（L1）および第 2 言語（L2）という用語を使用します。

■応用言語学の枠組みの有用性

本書が「L2 の習得・処理・学習・教授・評価」に関わる内容を応用言語学という枠組みで扱おうとするのは，そうしたアプローチが L2 教育に関わるジェネラリストの養成につながると考えるからです。

筆者は，長年，L2 教育やその周辺領域を専攻する学生の指導に従事してきましたが，その中で強く感じたのは，L2 の習得や学習に関わる幅広い内容を理解できる人材養成の必要性でした。自分自身の専門とする内容について深く学ぶことはもちろん重要ですが，そうした専門知識は，当該分野を取り巻く広範な知見に裏打ちされて初めて意味を持ちます。とくに重要になるのは，実践的知識と理論的知識をバランスよく身に付けることです。
たとえば，語彙指導に関心がありながら語彙記憶のメカニズムについて知識がなかったり，逆に，言語習得理論に詳しいものの具体的な教授法の知識がなかったりする場合，L2 教育に関して，どのような分野を専門にするにせよ，また，実践研究と理論研究のいずれを研究テーマにするにせよ，大きな成果を挙げることは難しいのではないかと考えます。本書が，応用言語学という枠組みの下で，L2 に関わる問題を一体的に扱おうとする理由もまさにこの点にあります。

■本書の方針と構成

本書の執筆にあたっては 4 つの基本方針を立てました。1 つ目は，応用言語学がカバーする広範な内容のうち，「L2 の習得・処理・学習・教授・評価」に関連する基本的事項を広く取り込むこと，2 つ目は，言語学・心理学・教育学・情報科学といった周縁分野の内容も含めて解説を行うこと，3 つ目は，海外の研究内容を幅広く取り込みつつも，日本語で通読できるようにすること（海外文献の引用はすべて拙訳によります），4 つ目は，表や図版等を利用し，全体像が見えやすい記述を心がけること

です。

本書は 11 章から構成されます。第 1 章「応用言語学と第 2 言語教育」では，本書全体の序論として，応用言語学の定義と射程を確認し，その中で，L2 教育がどのように位置付けられているかを概観します。

第 1 部「第 2 言語の習得と学習」には第 2 章〜6 章が含まれます。まず，第 2 章では，「言語習得の基本モデル」に注目し，経験説，生得説，複合説に基づく各種の発達・言語習得モデルを概観します。第 3 章では，「言語の対照」に関して，対照分析・誤用分析・中間言語分析・学習者コーパス分析の概要を整理します。第 4 章では，「言語処理」に注目し，心理学・心理言語学・脳神経言語学等の枠組みをふまえつつ，人間の言語処理に関わる心的システムのありようについて考えます。第 5 章と第 6 章では，「学習者特性」に注目し，L2 習得の成否に影響する個人差要因として，年齢・適性・性格・学習スタイル・学習方略・動機づけの問題を扱います。

第 2 部「第 2 言語の教授と評価」には第 7 章〜第 11 章が含まれます。まず，第 7 章と第 8 章では，「言語教授法」に注目し，過去の主要な教授法の変遷を跡付けます。第 9 章では，「言語能力観」の問題を取り上げ，評価論や教育目的論の枠組みもふまえつつ，第 2 言語の能力がどのように定義されてきたかを考えます。最後に，第 10 章と第 11 章では，「言語能力の評価」および「言語能力テスト」を取り上げ，L2 言語能力の測定と評価に関わる理論的背景および主要な言語テストの内容を概観します。

◆ ◆ ◆

本書の内容は多岐にわたるため，原稿作成の段階で，井上聡（環太平洋大），今道晴彦（広島大），内田諭（九州大），小泉利恵（順天堂大），建内高昭（愛知教育大），西田理恵子（大阪大），矢倉晴子（大和大），李在鎬（筑波大），若林茂則（中央大）の各氏を初めとする各分野の専門家に一部をお読みいただき，専門的見地からのコメントを頂戴しました。また，ひつじ書房編集部の森脇尊志氏からも多くの有益な指摘をいただきました。心より御礼申し上げます。

いただいたご助言をふまえ，読みやすい記述になるよう意を尽くしましたが，入門書という性質もあり，相当に割り切った説明になっている箇所や，筆者の力不足により，書き漏らした点や，不十分な記述が残っているかもしれません。脱稿後に見つかった誤記の訂正や最新情報の追加等については，筆者の研究室のウェブサイトで行っていく予定ですので，あわせてご覧いただければ幸いです。

読者におかれては，本書を通して「L2 の習得・処理・学習・教授・評価」に関わる応用言語学の幅広い研究の概要をつかんでいただき，以後，それぞれの領域の専門書を手引きとして，関心の深い分野の専門的な研究・学修に進んでいただければと思います。本書が，これから L2 教育の研究・実践の大海に漕ぎ出そうとする若き読者にとって良き羅針盤になることを願っています。

2017 年 1 月

神戸・六甲にて　石川慎一郎

『ベーシック応用言語学』の特徴

1. 応用言語学に関わる幅広い内容の紹介

11 章構成，全 300 ページを超えるボリュームで，応用言語学の諸相を詳しく扱います。

◎索引の一部より

…アイテムバンク　／曖昧耐性／アウトプット仮説／アクティブラーニング／足場掛け／閾値仮説／維持リハーサル／イディオム／イベントインデックスモデル／イマージョンプログラム／インターネットテスト／インタラクション仮説／インフォーマントメソッド／インフォメーションギャップ／インプット仮説／ウェルニッケ野／ウォールチャート／英検／英語帝国主義論／エスノグラフィックアプローチ／エピソードバッファ…

2. 日本語教育・英語教育の両面に対応

読者のニーズをふまえ，英語教育だけでなく，日本語教育研究の入門書としても使用できるよう配慮しています。

◎L2 習得における性格論研究のレビュー

L2 英語学習者関連研究

・Karlin and Nishikawa（2008），荒木（2012），中村・山本（2000）　他

L2 日本語学習者関連研究

池田（1997）　他

◎L2 習得における動機づけ研究のレビュー

L2 英語学習者関係

小磯（2005），大畑（2012），加藤（2006），廣森（2003）他

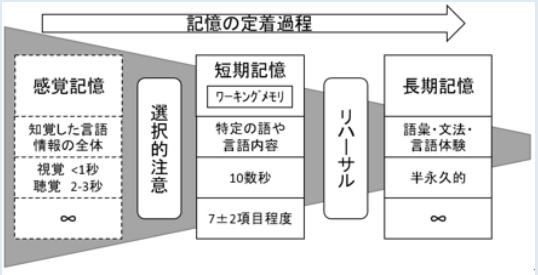
L2 日本語学習者関係

堀越（2010），成田（1998），小林（2008），李（2003）他

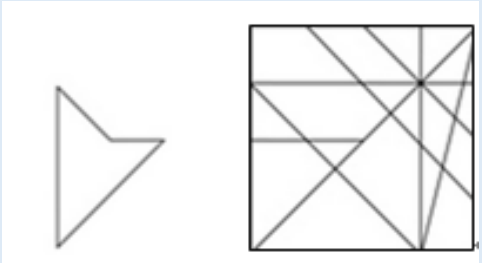
3. 理解を促進する図版や表の活用

文章による丁寧な解説に加え，図版や表も多く紹介し，初学者であっても内容理解が容易になるよう配慮しています。

◎記憶のボックスモデルの概念図



◎場独立性を診断する埋没図形問題例



4. 幅広い L2 教授法の体系的紹介

教育実習で求められる L2 教授法の知識を体系的に示すべく，本書では 2 章を割き，古典的教授法から日本ではあまり知られていない現代教授法まで手厚く紹介しています。

◎本書 7～8 章で扱う教授法

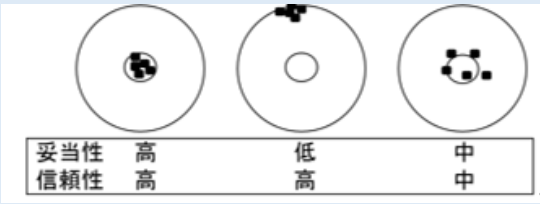
グラマートランスレーションメソッド／グレイディッドダイレクトメソッド／オーラルアプローチ／シチュエーショナルランゲージティーチ

ング／オーディオリンガルメソッド／トータルフィジカルレスポンス／ナチュラルアプローチ／フォーカスオンフォーム／ホールランゲージ／テキストベーストインストラクション／コミュニカティブランゲージティーチング／コンピテンシーベーストランゲージティーチング／レキシカルアプローチ／イマージョンプログラム／コンテントベーストインストラクション／サイレントウェイ／コミュニティランゲージラーニング／サジェストペディア／多重知能理論／コーパラティブランゲージラーニング

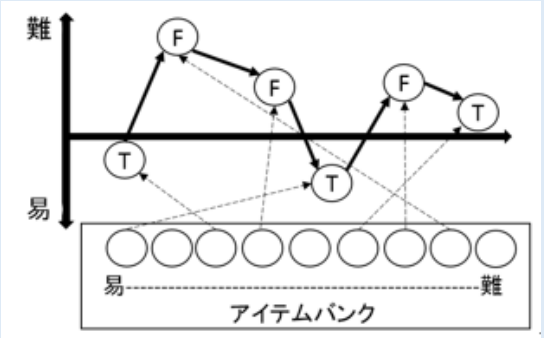
5. 言語テスト理論についても詳細に解説

類書において扱いが手薄であった言語テスト理論についても，古典的テスト理論・現代テスト理論の両面にわたり概要を詳しく紹介しています。また，テスト理論の実践として，「TOEFL」や「日本語能力試験（JLPT)」等の具体的内容も紹介しています。

◎テストの妥当性・信頼性の概念図



◎アダプティブテストの出題アルゴリズム概念図



6. 自主学習を促すガイド

全章末には，「文献ガイド」と「発展学習のヒント」を示しています。後者は，レポート課題や授業内ディスカッション課題として使用できます。また，巻末には 600 本を超える詳細な文献リストが提供されています。

◎4 章（言語処理）「発展学習のヒント」

（1）反応時間実験において，誤答された問題の反応時間を分析に加えるかどうかは様々な議論があり得ます。誤答を含んで分析することの利点と欠点についてディスカッションしてみよう。

（2）少なからぬ心理言語学の研究は，自動化という概念を出発点としており，反応時間で言えば早ければ早いほど，脳反応で言えば反応（活性）が低ければ低いほど，自動化と習得が進んでいると考えます。しかし，この前提には問題もありえます。自動化仮説の問題点についてディスカッションしてみよう。

（3）コンピュータ上で手軽に英単語処理の反応速度を調べることができる CELP Test のソフトウェア（門田・野呂・氏木・長谷，2014）を用い，自分自身，あるいは，周りの人の英単語処理の速度と正確度を比較してみよう。速度と正確度はどの程度，相関しているだろうか。速度と正確度はどちらが習熟度をよりよく予測しているだろうか。